

いで湯の里でのんびりゆったり、 球磨川で遊び、 球磨焼酎の香りを楽しむ。

ホタルの里を訪ねて——人吉・球磨

風に誘われて人吉・球磨地方へ旅に出ることにした。九州自動車道八代—人吉間が開通してからというもの、そこは遠くで近いとっておきの遊び場だ。川の恵みと山の恵み、豊かに湧き出る温泉、そして手つかずの自然が迎えてくれる。足の向くまま、気の向くまま、のんびり、ゆったり、気ままな旅が始まる。

探し物は、 新鮮な夏の香り

初夏の風を感じたら、思いつき深呼吸をした。そんな思いを込めて、湯の里人吉へ。眩いばかりの夏の陽射しが、歓迎しているような気がする。

九州自動車道が開通してからというもの、人吉・球磨地方はぐっと身近な存在になった。熊本ICから九州自動車道にのれば一時間、あつという間に到着。『動』の球磨川と『静』の九州山脈。期待どおり、思いつき深呼吸ができてさうだ。

とっておきの 景色を再発見する

まず最初に、球磨川のほとりに佇む『中津留美術館』を訪れた。平成三年十二月に開館した美術館、対岸には、相良七百年の歴史を伝える人吉城跡が

陣取っている。その組合せが何とも言えずミスマッチで、また面白い。館内には、常設の古美術品や人吉在住の画家宮崎精一氏の絵画、イタリアのファツィーニの彫像が展示されていた（六月半ばまで）。人吉城跡を見ながら、美術館から見る景色が一番ステキだと地元の人が教えてくれた。鑑賞のあとは、喫茶室でコーヒーでも飲みながら過ごしたい。空をキャンバスに見立て、球磨川と人吉城跡の雄姿を描いて



●中津留美術館 ミケランジェロのピエタ、タピデ像など一流品を展示。また、館内や芝生の庭園を利用して講演会や演奏会など催される。料金700円。開館9～17時（入場は16時まで） 水曜休 0966・24・6288

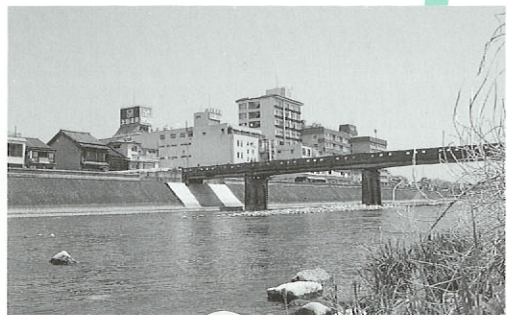
みるといい。ここにも常設の絵が一枚、時折、そのキャンバスに球磨川下りの船も刻み込まれる。ふと、気付いた。川の色も木々の色も同じ緑色であることとを、それでいて、微妙に緑の色が違うことも。まさに自然が創り出す色の変化だ。そこだけ、ゆっくりと、ゆっくりと時間が流れていた…。



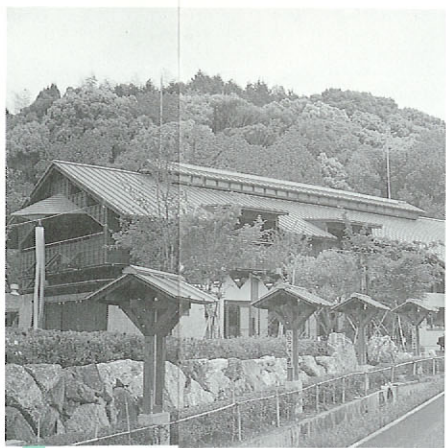
●人吉城跡 700年の歴史を今も伝える相良氏の居城「人吉城跡」。この時期の城内は、線にあふれており散策にももってこい。別名を「織月城」という。入園自由。

視線を変えれば 気持ちのリフレッシュ

織月大橋、人吉橋、大橋、水ノ手橋、国道219号線と人吉市内を結ぶ橋が球磨川に四本架かっている。大橋を市内から渡ると、下に中川原公園が広がっている。桜の季節ともなると公園では宴会が繰り広げられ、また、夏が近づくとカヌーイストがキャンプを張り、川でカヌーに興じるといふ。河原まで下りて水につけてみると、冷たく、そして緑色に透き通っていた。太陽に輝く水面を眺め、浅瀬を勢いよく流れる川の音を聞きながら、低い視線で街を眺める。間違いなく中川原公園は、人吉の特等席だ。



●中川原公園 球磨川の中洲に広がる中川原公園。ちょっと視線を変えた街の眺望が楽しめる。春は花見客で賑わい、夏はカヌーイストの格好のキャンプの場となっている。



●山江温泉健康センター お湯はやわらかく、飲用すると胃腸病に効く。大浴場、露天風呂、障害者専用浴室がある。料金500円（70歳以上は300円） 10～21時 休 2・4月 0966・22・7171

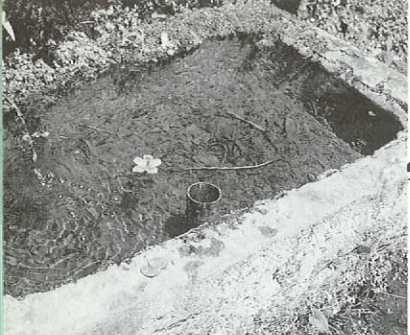
ありったけの小銭に 願かけて

次に目指すは、永国寺を開山した実底超真和尚の隠居寺として建立された『石水寺』。寺へ入るため馬氷川に架かる眼鏡橋を渡る、と言っか、登って下る。その昔、いかにして造ったのか、と考えさせるほど、傾斜の大きな古い古い石橋だ。石段を登り、まあい山門を見上げながらくぐる。どこから見ても不思議な形の山門、かわいともいえる。境内の右手には、開山の



●石水寺 石造りの古い眼鏡橋と、まあ面白い山門がトレードマークの『石水寺』。境内には、天然記念物の海棠があり4月には花見客で賑わう。境内拝観自由。 0966・22・4411

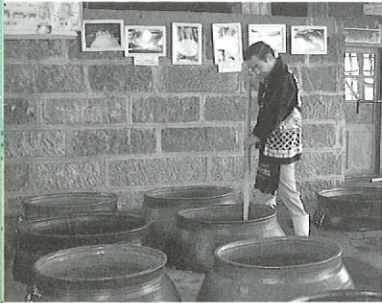
折り和尚が植えたといわれる樹齢二百年以上の海棠の巨木（天然記念物）があり、四月上旬には海棠祭りが開催される。この時期はまた、海棠の花だけでなく桜の花の花見客でも賑わう。左奥に銭洗弁天が鎮座する。小銭をこの水で洗うと増えるとか…。お財布の中の小銭をかき集めて洗い清めた。花と石と水の寺、『石水寺』。この他に『十六羅漢図』や『地獄絵図』の掛軸など、見どころの多い古寺の一つであった。



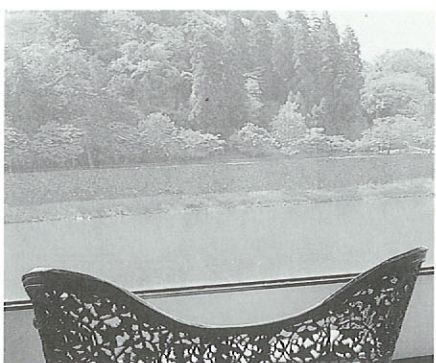
小銭を洗い清めると御利益があると言われる石水寺の銭洗弁天。

伝統の心を発見 甘ずっぱい香りに包まれて…

車で走っていると赤レンガの煙突が目に入る。人吉といえば、球磨焼酎「焼酎を飲まんばわからん（話ができない）」と言われるほど、生活の中に入りこんでいる。現在、人吉・球磨地方には、三十の球磨焼酎の醸造元があり、そこには三千通りのこだわりがある。江戸時代末期創業の『深野酒造本店』を訪ねてみた。今も昔も変わらぬ風情を残す蔵造りの醸造元だ。創業と同時に作られたという仕込み用のカメ



●深野酒造本店 旨い水にこだわり続けて生まれた球磨焼酎。芳香と風味は天下一品だ。『深野酒造本店』の他にも約30の醸造元で蔵見学ができる。問い合わせは／球磨焼酎醸造組合 0966・22・5059



中津留美術館の喫茶室から望む人吉城跡。

が時代を物語っていた。ここでは、手作り焼酎へのこだわりから、九月半ばから四月までの約七カ月間を仕込み期間としている。「この伝統の醸造法は今後も変わることはない」と、深野代表は言い切る。「のれん」に対する誇り、そして「のれん」に懸ける男の意地がこの言葉に凝縮されていた。



●人吉温泉巡り「入浴手形」 この手形11枚で、ホテルや旅館のお風呂3ヵ所に入浴できる。旅の記念に、そしてお土産にも喜ばれている。1枚1000円（有効期限2年）。入浴時間15～21時。

外へ出ると、子供たちの遊びに興じる声や響いて来る。辺りは夕暮れ時の匂いを漂わせていた。川の清らかな声を、そして、山の新緑のささやきを、思いつき体で感じることができた。人吉・球磨地方に住む人々の人情にふれ、豊かに湧き出る湯につかり、満足感でいっぱいの小旅行。初夏の香りは、ほんのりと甘酸っぱかった…。